

研究タイトル：

近代日中文化の比較研究



氏名：	朱 琳 / ZHU Lin	E-mail：	zhulin@sendai-nct.ac.jp
職名：	助教	学位：	博士(国際文化)
所属学会・協会：	日本国際文化学会、日本思想史学会、地球システム倫理学会		
研究分野：	交流史、国際文化学、日本思想史		
キーワード：	異文化理解、近代化論、中国文学研究会、鶴見和子		
技術相談 提供可能技術：	<ul style="list-style-type: none"> ・19世紀～20世紀における日本と中国の文化交渉史 ・異文化受容・他者認識を中心とする国際文化論 ・外国人留学生向けの日本語・日本文化の教育 		

研究内容：

課題1：「多領域をむすぶ日本知識人の中国認識の形成」

我々は常に他者という鏡を通して自己を構築している。近代日本の知識人たちが他者としての中国を見る際に、自らどのような問題意識を持ち、戦争を経験して戦後になってからその意識がどのように転換したのか、彼らにとって中国はいかなる存在であるか。この一連の問題にアプローチするために、私は「中国文学研究会」という知識人の集団に注目した。

その同人である竹内好・武田泰淳・實藤惠秀・松枝茂夫・岡崎俊夫・増田渉などは、戦時中に積極的に文筆活動を行い、戦後でも戦後思想・戦後文学・文化交渉と言語問題・ジャーナリズムという四つの領域に引き続き活動を展開されていた。そのため、本研究はいわゆる団体としての活動時期に縛られず、前述した四つの領域に形成された様々な中国像を有機的に関係することを検証し、戦後日本の中国認識の形成過程の一側面を解明する。

課題2：「日中近代思想の歴史像と連鎖」

東日本大震災以後、日本福島原発事故を象徴として、欧米中心的近代がすでに破綻を迎えたという論調がしばしば見える。本研究は新たな近代性を創出する一環として、日本と中国を中心とする東アジアに見られた「内発性・主体性・共生性」を中心とする近代性の歴史像を発見したい。

考察対象として取り上げたのは、日本において「内発的発展論」の提唱者として知られている鶴見和子(1918-2006)と、中国において「小城镇建設」などの地域発展理論で国際的な注目を集めていた費孝通(1910-2005)である。本研究は二人の理論が産出される経緯に注目し、その近代思想の内実を比較しながら、彼らの視点を通して戦後における日本と中国の「草の根の人々」が、近代化のプロセスにおいてどのような役割を果たしたかを探究する。歴史的経験を通して今後の日本と中国が連携しながら自国の特徴に符合するような発展を実現するための指針を提供したい。

提供可能な設備・機器：

名称・型番(メーカー)	